

宝剣山古墳

佐伯市向渡町所在古墳調査報告

1980

佐伯市教育委員会

序 文

宝剣山古墳の所在する佐伯地方は、温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれて、県南における文化の中心地として現在にいたっています。

とりわけ、豊後水道に臨んで開けた佐伯湾は、古来より海上交通の要衝にあたり、宝剣山古墳は、湾に沿って点在する古墳の一つとして、周知されていました。

このたび、佐伯市都市計画事業長島土地区画整理事業の施行にともない、記録保存のため発掘調査を実施しました。

佐伯地方における古墳の本格的発掘調査は、本事例が最初のことであり、この地方における古代文化を解明する端緒として意義深いことと存じます。

ともあれ、遺跡の一つが消失したことは、埋蔵文化財保護のうえから遺憾なことに違いありません。

このうへは、本調査報告書が文化財保護ならびに学術研究に活用されることを祈念する次第です。

終りに、暑いさなかを調査にあたっていただいた、別府大学文学部 賀川光夫教授、県文化課の職員の方々、ならびに地元関係者各位に対し、深く謝意を表します。

昭和55年3月

佐伯市教育委員会教育長

安 部 亀 雄

目 次

I	はじめに	1
II	歴史と環境	2
III	宝剣山古墳の調査	4
IV	考察	19
V	結語	28

例 言

1. 本書は佐伯市教育委員会が昭和53年度に実施した佐伯都市計画事業に伴う宝剣山古墳緊急発掘調査の報告書である。
1. 本書の執筆は、主としてI、II章 清水宗昭、III章 村上久和・高橋徹、IV章 村上・高橋、V章 清水・高橋が分担し、編集は主として高橋があたった。

Ⅰ. はじめに

佐伯市は毛利氏2万石の城下町として、いたるところに古い町並を残している一方、県南地方における一大工業地帯を形成しており、近年人口の集中により市街地の近代化が叫ばれてきた。

このため佐伯市では、昭和47年度より佐伯都市計画事業を実施しているが、昭和53年度の長島土地区画整理事業の施行により、同地区に所在する宝剣山古墳が削平の対象となることが明らかになった。この事態に対応するため、市教育委員会は、本古墳が佐伯地方における唯一の大形の盛土古墳であることを考え、その保存対策について、市都市計画課、県教委文化課と協議を重ねた。しかし、宝剣山古墳が立地する丘陵部（旧島）の削平が相当進行しており、現状での保存が極めて困難であると判断されたため、市教育委員の主催によって発掘調査を実施することとなった。

本古墳はすでに賀川光夫によって、組合わせ式の箱式棺を主体とする円墳であることが確認され、その重要性が指摘されていた。とくに佐伯地方は、旧海部郡内においても、臼杵地方と比較して古墳時代の遺跡に乏しく、見るべき古墳が極端に少ない地域である。それだけに宝剣山古墳の調査が進むにつれ、本古墳の重要性が浮き彫りにされてきたのであるが、結果的に記録保存という手段によらざるを得なかった。調査も充分時間をかけたとは云い難いが一応ここにその成果をまとめることにした。

調査期間

昭和53年5月26日～7月10日

調査体制

事業主体 佐伯市

調査主体 佐伯市教育委員会

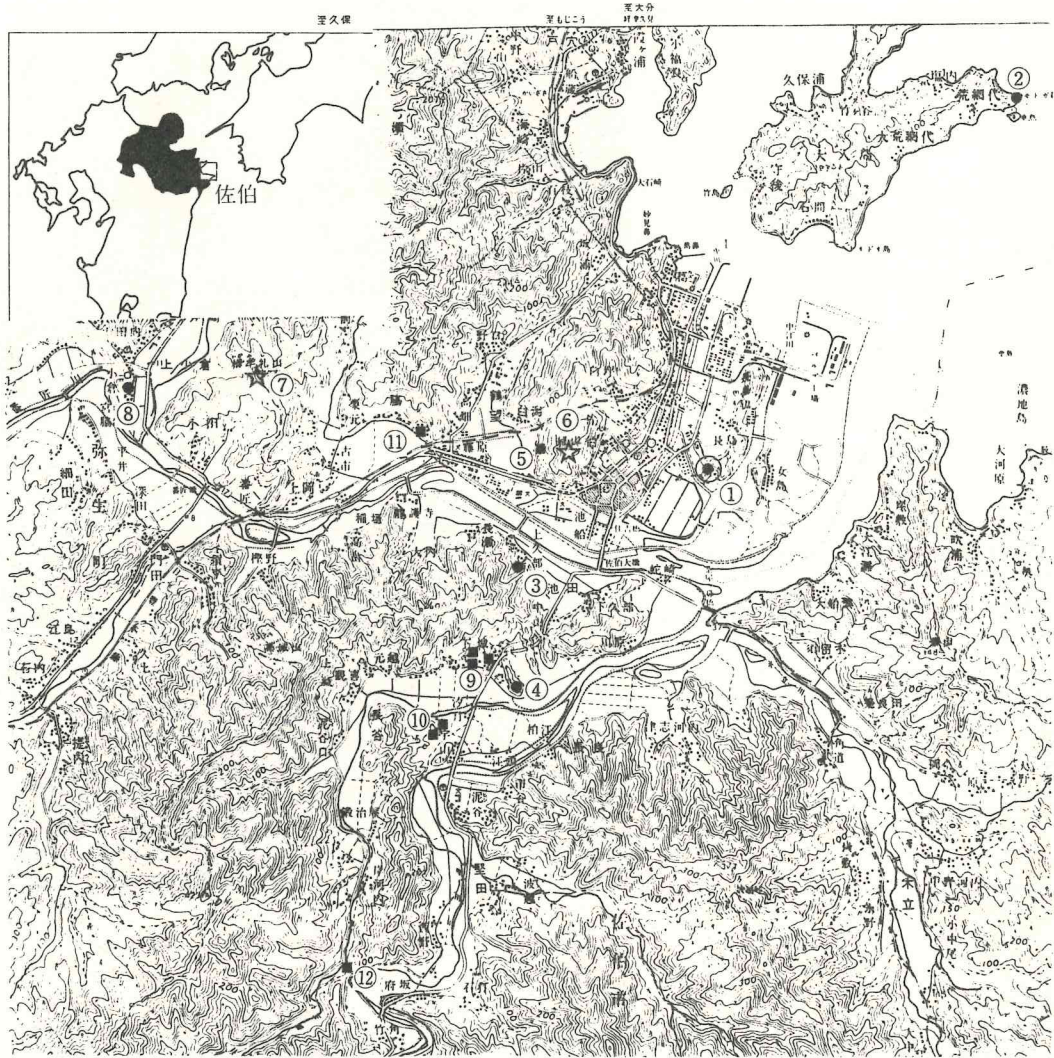
調査指導員 賀川光夫（県文化財保護審議会委員）

調査員 加藤健一（佐伯市教育委員会社会教育係長）・清水宗昭・高橋徹・村上久和（以上県教育委員会文化課）



II. 歴史と環境

豊後水道にのぞむ県南の海岸部は、複雑な海岸線をもつ典型的なりアス式海岸であり、地勢は一般的に沖積地が少なく、急峻な山地が優位を占めている。こうした中で、佐伯市に河口をもつ番匠



1 図 佐伯市周辺の主要遺跡

(国土地理院2万5千分の1「佐伯」より)

■	縄文・弥生遺跡
●	古墳
☆	山城跡

- | | | |
|--------|-----------|--------|
| ①宝剣山古墳 | ⑤白瀧遺跡 | ⑨下城貝塚 |
| ②東島古墳 | ⑥鶴屋(佐伯)城跡 | ⑩長良貝塚 |
| ③岡ノ谷古墳 | ⑦母牟札城跡 | ⑪脇貝塚 |
| ④岩清水古墳 | ⑧上小倉横穴群 | ⑫柁ヶ原遺跡 |

川は、九州山脈の北端部一帯を水源とする県内屈指の河川であり、中・下流域の兩岸に比較的まとまった沖積地を発達させている。

宝剣山古墳が立地する長島も、かつてはその名のとおり、佐伯湾に浮かぶ小島であったが、番匠川の沖積作用と後世の埋立てにより、陸化し残丘状の地形を呈するようになったものである。

こうした佐伯地方は古くから海部地方の文化の中心的役割を果してきたとみられる。古代では穂門郷と称されるものがこの地域を指すものと推定され、その大領海部氏の拠点になったものと思われる。中世では大友氏の豊後入国に協力した佐伯氏が、樽牟札城を本拠地とし佐伯荘の地頭として支配した。近世では、毛利氏2万石の封地となり、鶴屋城（佐伯城）の城下町として明治維新に至っている。

周辺地域をみても、番匠川流域では先史時代の遺跡が多い。佐伯市の西部本匠村宇津々の石灰岩地帯にある聖嶽洞穴は、後期旧石器時代の台形様石器・細石核とともに化石人骨が出土している。さらに縄文時代早期の遺物は、下城遺跡(下層)、長良貝塚(下層)をはじめ、久留須川沿いにはとくに遺跡が集中し、八匹原・宮野・道越・千又・下口・上ノ原・亀ノ甲・カサノ原等の押型文土器やチャート製石器を出土する遺跡が濃密に分布している。こうした分布密度の高さは、番匠川の河床でチャートの原石が産することもあわせて、この流域が立地の好条件を備えていたことをものかたるものである。しかし、それ以後縄文時代を通じては、白瀉遺跡（B地点）で後期土器片が確認されているほか、現時点での遺跡密度は空白に近い。

弥生時代になるとこの地方は研究史的に重要な遺跡が多い。東九州の弥生前期末～中期の「下城式」土器の標式となった下城貝塚は、戦後間もない昭和23年に鏡山猛・賀川光夫の両氏が中心となって調査が行われ、平地式の住居跡、鍛冶炉とみられる工房跡（堅穴式）とともに貝類・獣骨類が出土している。このほか長良貝塚・白瀉遺跡とともに弥生中期の貝塚を伴う集落とみられる。また白瀉遺跡では後期の二重口縁土器が出土しており、この時期まで集落が存続していたことを示してくれる。このように貝塚を伴う弥生時代の遺跡は、番匠川の河口付近に集中してみられる。

古墳時代では、東島古墳・宝剣山古墳が箱式石棺を主体とする盛土古墳である。前者は大入島の東端部に位置し、後者も旧長島の丘陵頂部に立地している。これより後出とみられる舟形石棺が市内上久部東禅寺境内（岡ノ谷古墳か）から出土している。これらはほぼ5世紀代の築造とみられるが、いずれも海岸に臨む位置にあることは特筆されよう。後期になると、海岸部では盛土古墳も含め、横穴古墳も見られない。番匠川流域では井崎川との合流点、弥生町小倉の上小倉横穴群が流域で唯一のものといえよう。

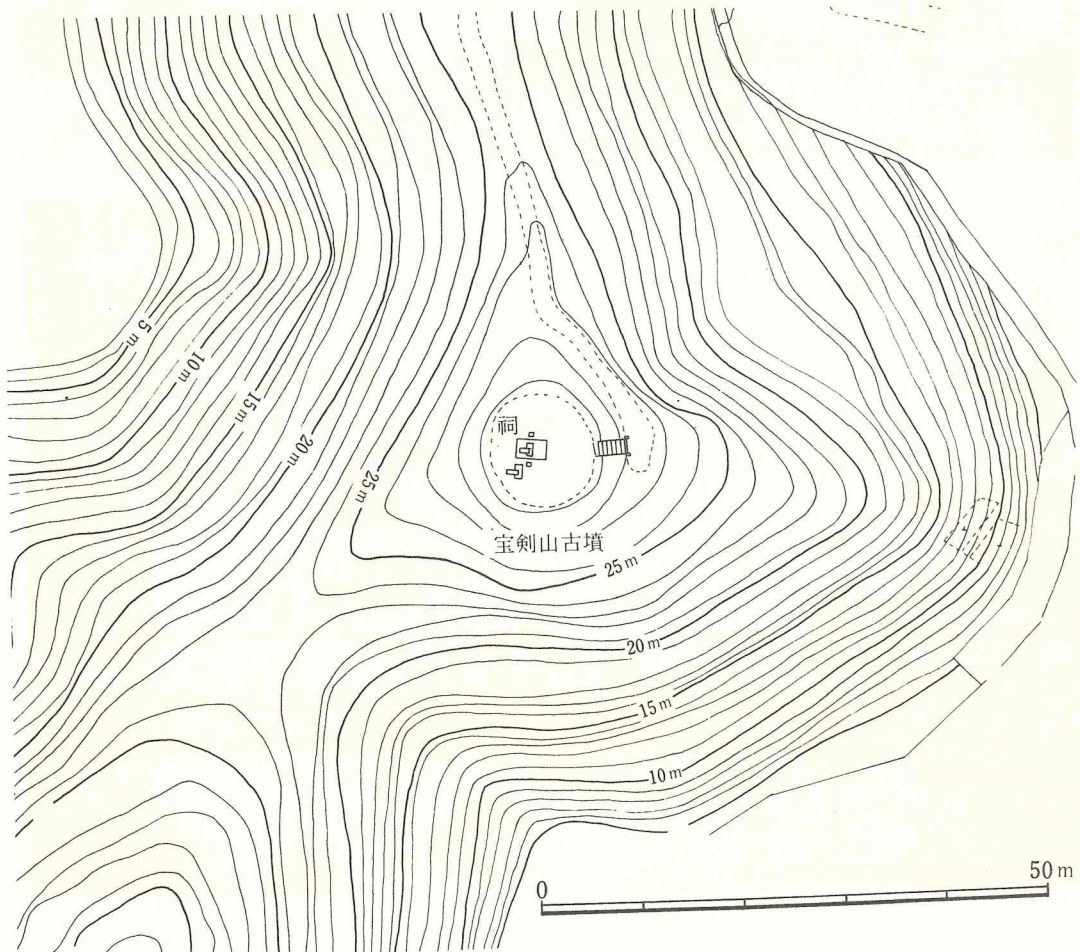
以上のように、この地域は各時代の変遷を見るには、なお今後の調査・研究の余地がのこされているが、縄文時代からいち早く開けた地域であり、弥生・古墳時代においても県南部における文化の中心を形成していたとみることができる。とくに弥生・古墳時代関係の遺跡は立地からみても、海洋性のつよい内容をうかがわせるものである。（清水）

III. 宝剣山古墳の調査

位置と環境 (2図) 宝剣山古墳は佐伯市向渡町に所在する。本匠村樫峯村付近に水源を発する番匠川は河口において複雑な三角州を形成しており、その堆積作用によって女島、長島などの小島群をとりまく沖積平野を発達させてきた。現在それらの小島群は小独立丘陵に変えられているが古老の話によると、この付近には塩屋村と称される地名も残っているように、大正の頃まで塩田が設けられており、現在の警察署付近から長島地区まで舟に乗って往来していたということである。番匠川の流れ込む佐伯湾は蒲戸崎と鶴見崎の半島にはさまれ、東方に豊後水道を臨む。佐賀関半島以南にみられる複雑なりアス式海岸は北から臼杵湾、津久見湾、佐伯湾とふところの深い湾を有し、その内外に多くの島々が点在する。長島の丘陵もかつてはこのような島々の一つであったわけである。

丘陵は南北に約1.5kmで細長く伸び、標高は最高所で79.0mを測る。近年佐伯市の都市計画による区画整理事業などの為、次第に削られ旧状を失いつつあり、宝剣山古墳を載せる丘陵の西南端を残すだけになっていた。垂直に近い崖上に古墳が取り残された状態であった。

墳丘頂部には石祠が祭られており、渡町地区の人々によって篤く敬われていた。石祠造営による



2図 地形図

と思われる削平で、墳頂部は平坦になっており、墳丘南側斜面も工事によって既に一部破壊されていた。

墳丘東側には石段が設けられているが、関係者の話によると以前には北側の部分に参道があったと言うことで、墳丘北側にみられる張り出し気味の等高線はその時の破壊の跡を示すものであろう。



(上) 宝剣山古墳遠景 (矢印)

(下) 宝剣山古墳墳丘および参道の階段

調査の概要

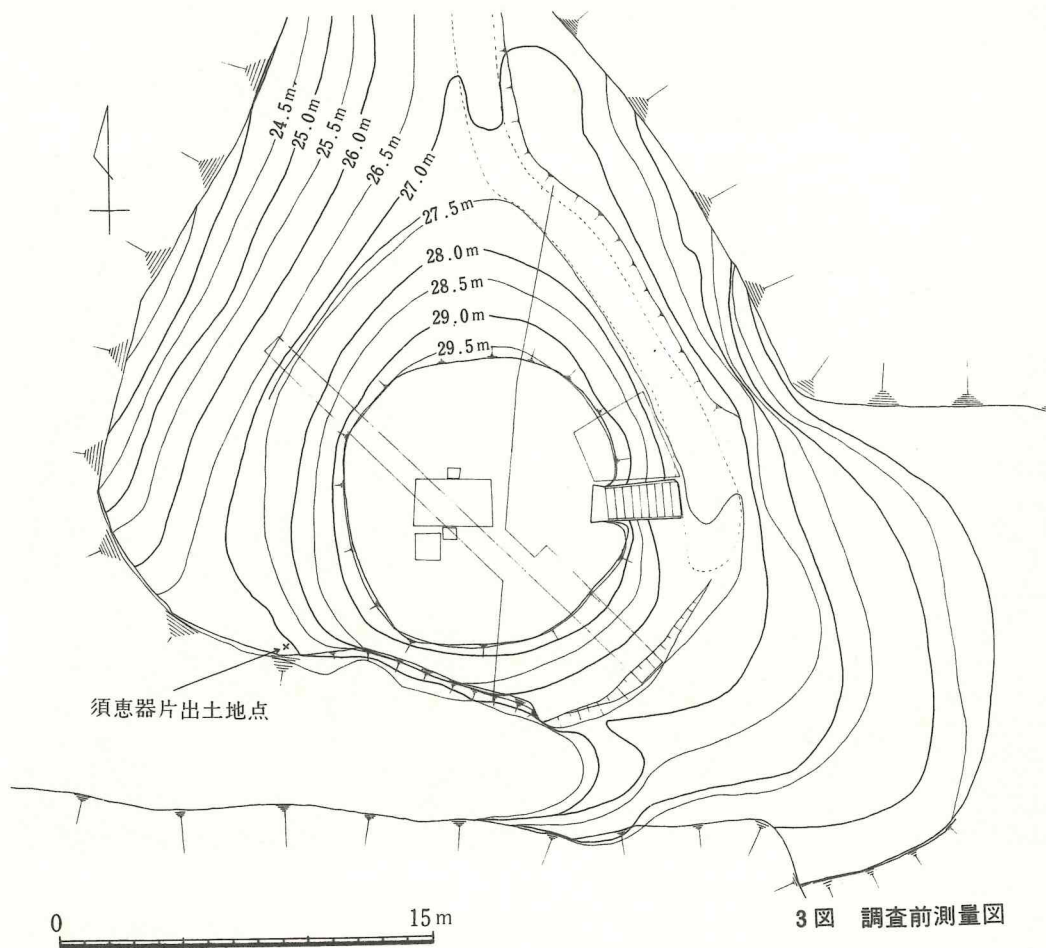
墳丘をⅠ～Ⅳ区に区切り、盛土を除去したが、東半分は全面的には剥ぐことができなかった（3図、4図）

深さ20～50cmの暗褐色をした表土（第Ⅰ層）を取り除くと粘質度の弱い淡黄褐色の盛土（第Ⅱ層）が現われる。これには砂礫の類いが全く含まれていなかった。第Ⅱ層の下は白黄褐色の粘質土で、礫が混る地山（第Ⅲ層）である。即ち当古墳はこの地山を整形し、その上に単一の盛土を行なって築いたものである。墳丘土層図（5図）にもあらわれているように、標高27.5mの等高線が描く弱楕円形が当古墳の墳丘裾部と考えられる。墳頂部の盛土は削平および流失で原形をとどめていないが、墳丘斜面の立上がりから推測すると約1m程の厚さに盛っていたものと思われる。即ち宝剣山古墳は南北約18m、東西約16m、高さ約3mの規模を有す円墳である。

第Ⅱ層の封土は20～50cmの厚さで墳丘地山の斜面にはこの封土上に葺石をめぐらしている。

葺石は拳大から人頭大の砂岩および頁岩の角礫で、比較的丁寧の下から上へ順次葺いている。Ⅳ区の西側斜面のものが比較的良好的な形状を残しているが同区東部やⅠ区東部などでは原形は大きく損なわれている。

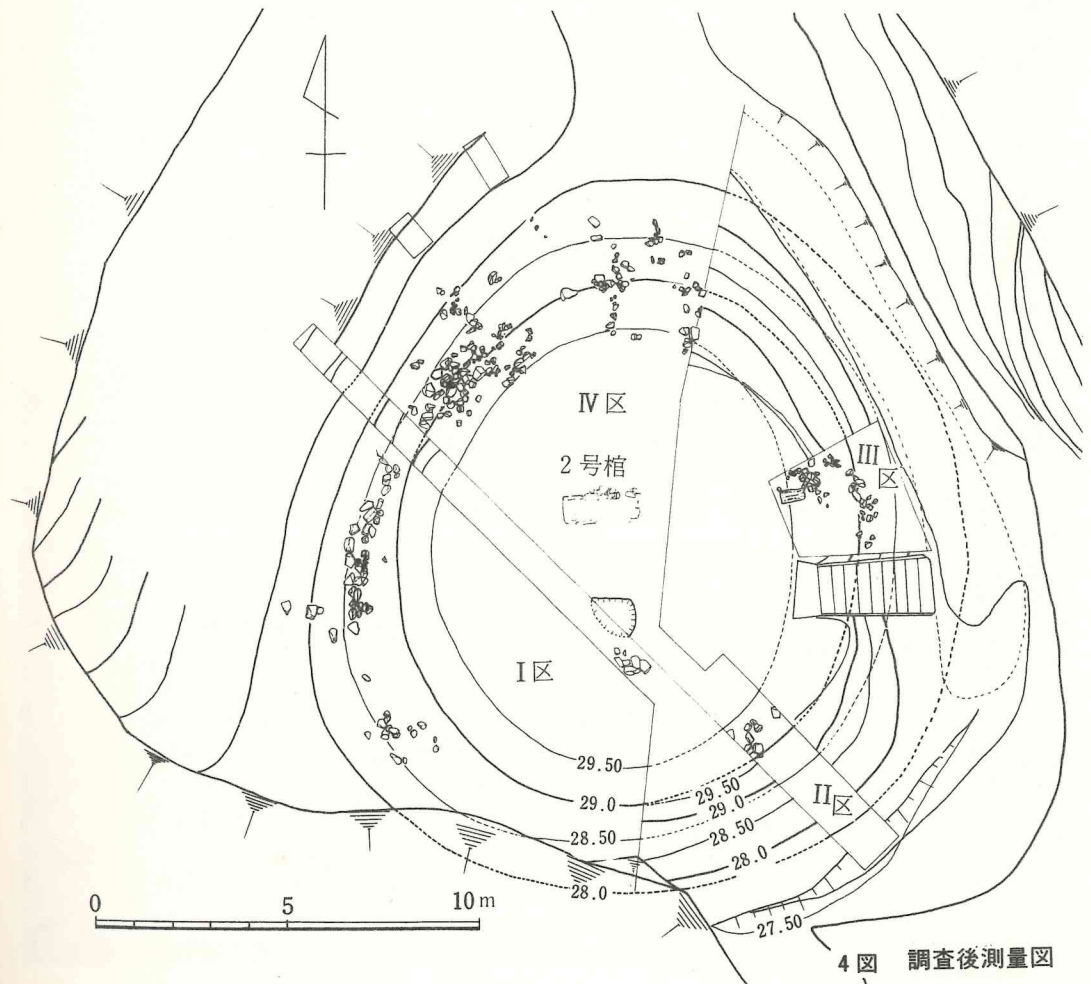
墳頂部に設けられた石祠を取り除くと、その真下に石囲いが現われ、内部から短甲片、鉄刀等の

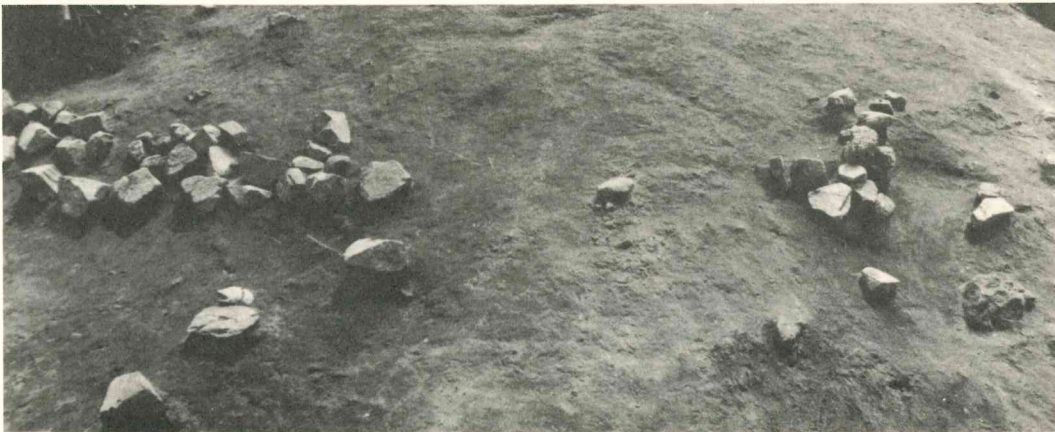


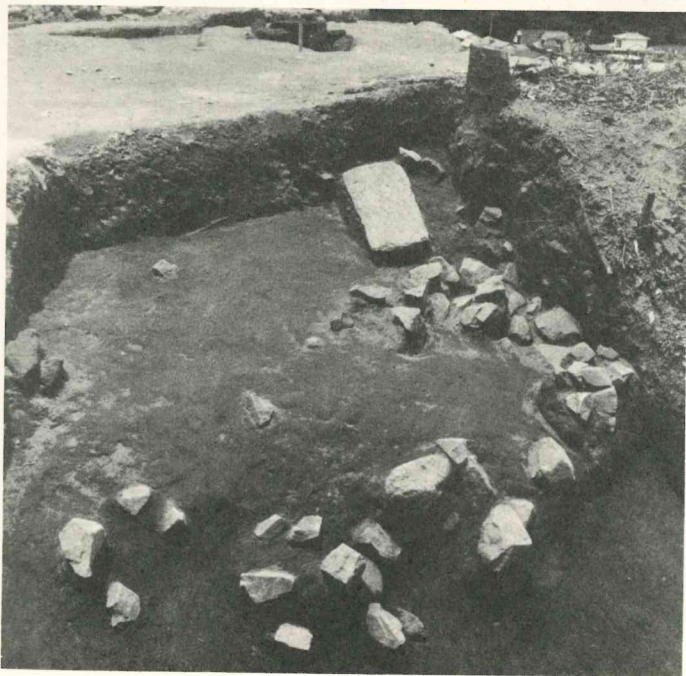
遺物が出土した。祠壇は封土上に作られており、東西3.20m、南北1.90mを測る。取り壊した後その跡を精査したが明確な遺構の検出は無く、基礎より20cm下で地山に続く。ただ祠壇の南東隅にわたる位置に、立ち上がりの非常に不明瞭な浅い不安定ピットが認められ、中から結晶片岩の細い破片が数点出土した。石棺の抜き取り跡の可能性の有無を検討したが、確証は得られなかった。石祠の北には凝灰岩製の石棺の一部が露出しており以前から注意されていた。墳丘中心部からわずかに北に偏している。なお前述の不明瞭なピットの南側に同種の凝灰岩片が打ち重なり投棄された状況で検出された。現表土面から浅いレベルで検出されており、格別古い時期の所産とは考えられない。

I区墳裾部から(3区×印)古式須恵器の破片が出土した。ほぼ地山上の封土中から検出されたが、上から流れ落ちて来た様子であった。調査以前にもこの付近から落ちたと思われる破片を清水が表採しており、同じ状況で落下したものと考えられる。墳丘斜面か墳丘上面に置かれていたものであろう

墳丘およびその周辺の遺物、遺構は以上のものに限られ、埴輪等は皆無であった。石祠の建設やたび重なる改修等の為に古墳は相当に損われており、葺石も本来は墳丘斜面全面に葺かれていたものと考えられる。

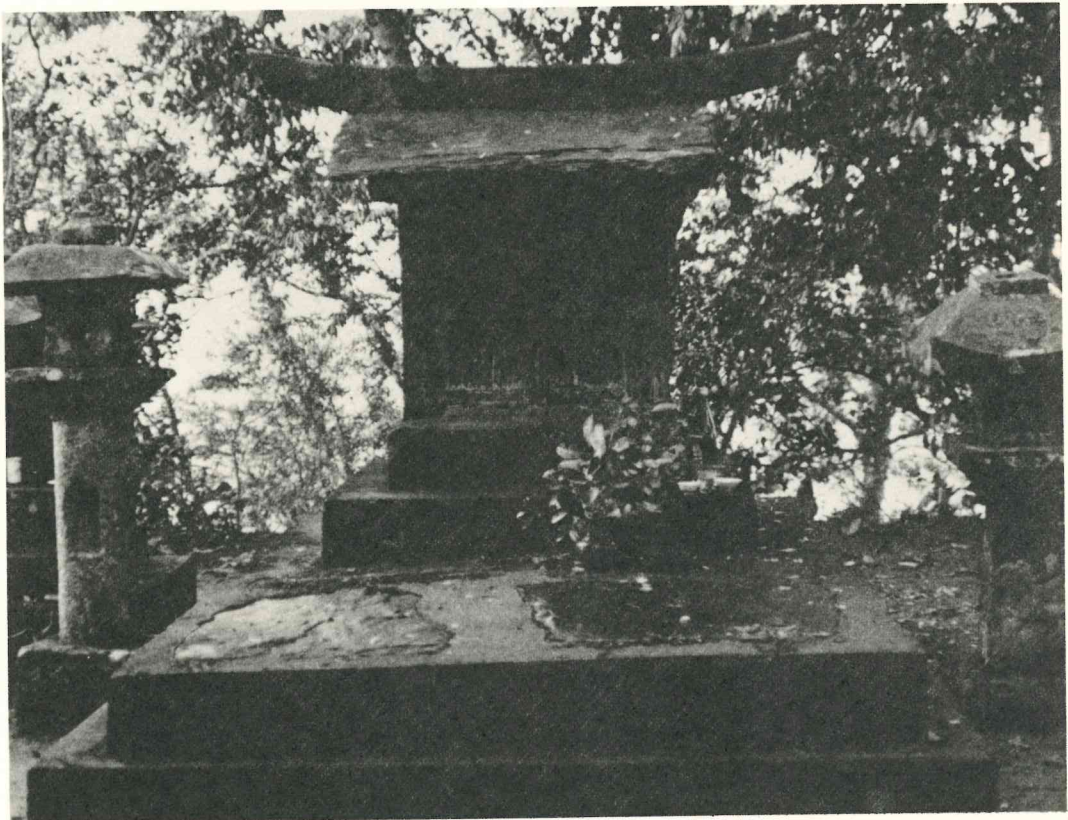
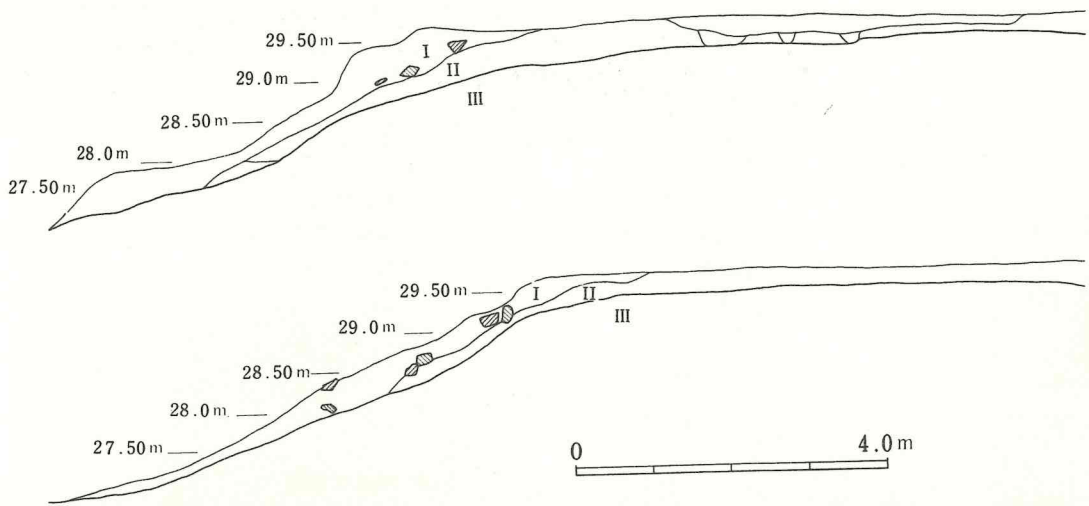






墳丘をめぐる葺石

葺石とは墳丘の斜面部をおおう礫で、その目的は封土の流失をふせぐためと考えられている。普通丸みのある河原石等が使われるが、宝剣山古墳では安山岩や頁岩の角礫が使われていた。II層の封土上面をおさえるように、下方から上方へ葺いている(9頁上)。写真はそれぞれIV区(8頁上、中)、I区(8頁下、9頁上)、II区(9頁下)。参道や鳥居の建設等の工事によってかなり破損されている。II区では地山から少し浮いた状態で、結晶片岩の板石が出土している。

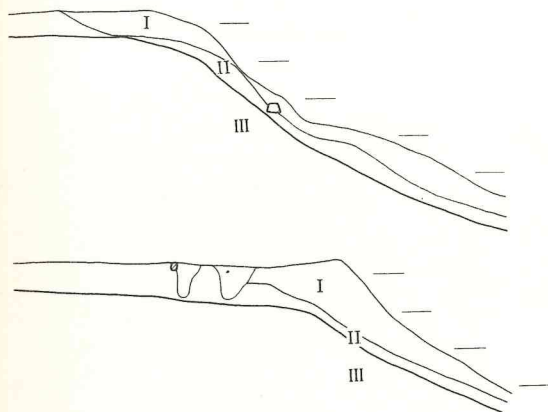


石祠正面写真

石祠の屋根の石材も結晶片岩割石で、長さ1.50m、幅63~65cm、厚さ3~7cm。
 石祠の扉を開くと、中に剣刀片が納められていた。祠壇にも結晶片岩板石が4枚敷かれている。

側
れ
て
祠
の
た
近
布
て
祭

坂
留
1
二
編
ら



(上) II - IV区南西側土層図

(下) I - IV区東側土層図

I層は表土層で20~50cm。

葺石はII層上面に葺かれている。

II層は砂礫を全く含まない淡黄褐色の盛土で、左図にみられるようにその立上がり角度から本来1.0~1.7m程度は墳頂部をおおっていたものと思われる。III層は礫混りの地山。

5図 墳丘土層図

主体部

1号石棺

墳頂の石祠下で検出された石かこいは深さ20~26cmで外法で東西67~69cm、南北52cmを測り、北側石の凝灰岩を除けばすべて厚さ4~5cmの結晶片岩の板石であった。まわりはセメントで固められており、底面には底板あるいは玉砂利等もみられなかった。内部には短甲片がうち重なった状態で納められており、またその下の南側壁付近から鉄剣、鉄刀、鉄鏃片および寛永通宝が出土した。祠壇の基礎を打ち壊す際にも排土より2枚の寛永通宝と鉄片が出土している。ところでこの祠壇や、祠の屋根にも結晶片岩の板石が使用されていたが、II区においても同種の板石が地山から若干浮いた状態で出土した。これらの板石は本来、組合式箱式石棺の一部であったと考えられる。後章で詳述しているようにこの結晶片岩は当地域には存在せず、直線距離で30~40km離れた佐賀関周辺に分布するものである。祠下の「石かこい」から出土したのと同様の鉄剣が石祠内にも永らく納められており、宝剣社がかつて何らかの理由で破壊を被った組合式箱式石棺およびその遺物を取り集めて祭ったものと考えられるのである。それ以後、数次の補修を経て現在にいたったものと思われる。

2号石棺 (6図)

長さ約1.7~2.0m、幅70~90cmの長方形土壇に凝灰岩製切石で組んだ箱式石棺を納めている。土壇はII層の盛土に掘り込んでおり、その底面は地山直上になる。石棺は破損が著しく原形を殆んど留めていないが、本来は側板、小口とも一枚の切り石であったと考えられる。内法で幅60cm、長さ140~150cm、深さ30cmを計る。石棺内の埋土には小さな玉砂利が少量混在し、かつ全体に朱に染まっていた。遺物としては西側小口部付近で床面から浮いた状態で鉄鏃片が出土しただけである。

当石棺は、土壇の掘り方や、石棺の破損状況、石材の風化等において、単なる盗掘による破損の結果とはみなし難い様相もあり、他から石棺を運んで来たとの古老の言い伝えもあるということから、この石棺が本古墳に確実に所属するものと直ちに断定することができない。

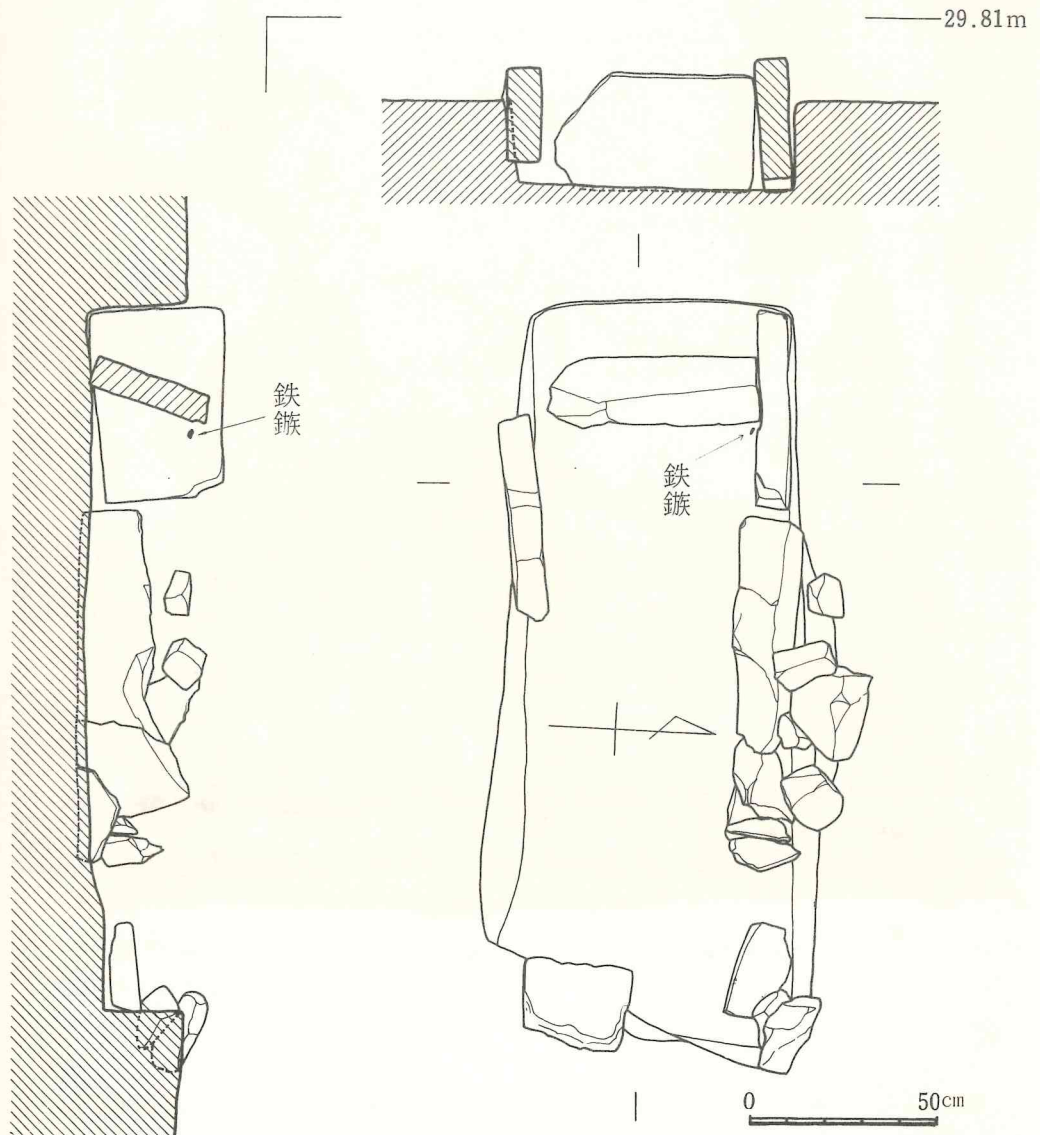


石祠下石囲い写真 短甲片は左隅にうち重ねた状態で納められていた。右上隅に鉄剣片がみえる。右側石のみ凝灰岩で他は結晶片岩板石。

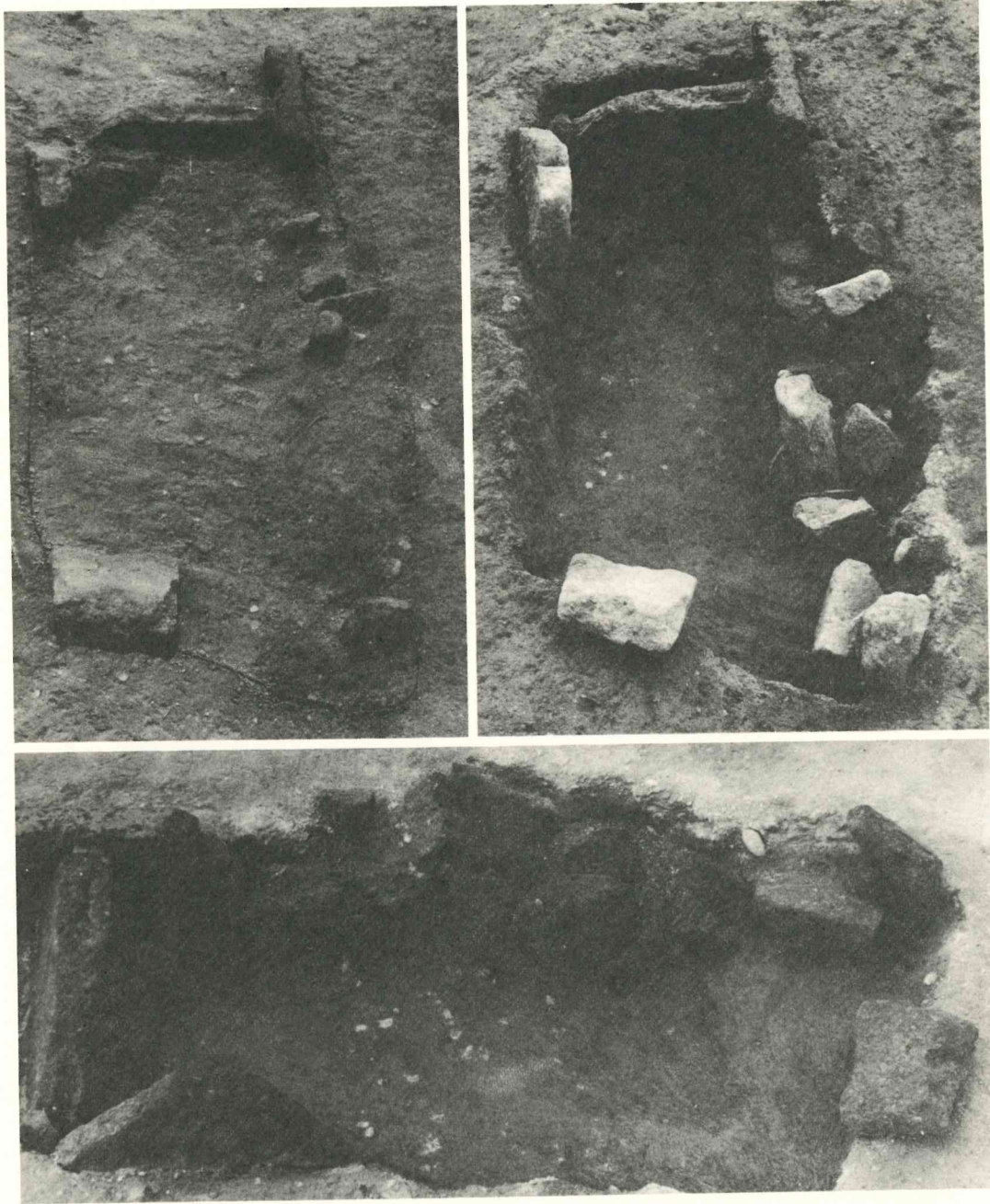
出土遺物

短甲（7図）三角板鋸留短甲で、左前胴と後胴が数片に割れた状態で出土した。右前胴を欠き、出土した左前胴も堅上は残存しない。しかしながら比較的遺存の良い後胴をもとに、帯金幅、各地板幅から復原してみると、後胴推定高43cm前後、前胴推定高30数cmで、前胴、後胴とも堅上3段、長側4段からなる7段構成のものになると考えられる。

前胴の長側1段は左前胴のものがわずかに残存するだけである。長側2段の帯金は幅3.4cmで、地板との鋸留には4対の鋸を使用する。鋸頭直径は約6.0mmで、その間隔は3.7~3.4cmほどである。長側3段は巾4.2cmで2枚の地板を中央から脇に向けて順に下重ねする。脇のものは三角板であるが



6図 2号棺実測図



2号棺

凝灰岩製の箱式石棺で破損をうけていた。西側の小口部付近を除いて殆んど原形をとどめていない。(上左)は検出前、(上右)、(下)は発掘後の写真。内部からは鉄鏃片が出土しただけで、それもかなり浮いた状況であった。

中央のものは、切出ナイフ形の鉄板を使用している。なお前者には腰緒孔が確認できた。裾板は幅6.3cm内外で、裾の覆輪は残っていないが、心々間約1.0cmの孔が並び、革組もしくは革包覆輪であろう。引合板は幅3.4cmで、長側2段の革金と円じ幅である。なお、前胴三角板の配し方は小林謙一氏の言うA型である。

後胴では押付板の大半が欠失しており、ことに右半部は残存しない。一応幅11cm内外に推定復原を試みた。

堅上第2段は3枚の地板から構成されと考えられ、左半部から推して中央の下重ねした三角板は両側の地板と各々3本の鋸で溜める。地板は各隅を丸く落したもので、中央の三角板は底辺22cm、高さ9.7cmを計る。

堅上第3段の幅は4.2cmで、帯金にはほぼ上下にそろえて4(+α)対の鋸を使用しており、その間隔は4~4.3cmとなっている。帯金中央にはワタカミ懸緒孔が確認できる。

長側第1段は5枚構成で中央の地板は底辺23cm、高さ10cmで、地板間の鋸留は各3本ずつになるろう。

長側第2段の帯金は幅3.7cmで、左脇部しか残っていない。この脇部のあたりで2本の鋸を使用し接合している。

長側3段の地板は5段構成で、外面幅5.0cm。中央三角板および右半部2枚を失っている。

鉄剣（第8図①～⑥）

祠内より1片と祠の主体部より5片出土している。①は、身部で現存長11cm、幅4.5cm、厚さ1.5cmで、断面凸レンズ状をなし、重量感がある。剣身面には、若干ではあるが錆が認められる。

②は現存長10.4cm、幅4.0cm、厚さ1.0cmの断面凸レンズ状をなす。①同様重量感のある身部で剣身面には、錆が認められず、ほぼ全面に鞘の一部である木質が、鉄錆をうけ付着している。

③は、祠中より発見されたものである。身部で、現存長6.2cm厚さ0.7cmのやや薄手のものである。断面は凸レンズ状をなし、錆は認められない。

④は現存長12.9cm、幅3.0cm、厚さ0.7cmの薄手な身部である。断面は、凸レンズ状をなし剣身面に錆は認められない。形態から剣先に近い部分と思われる。

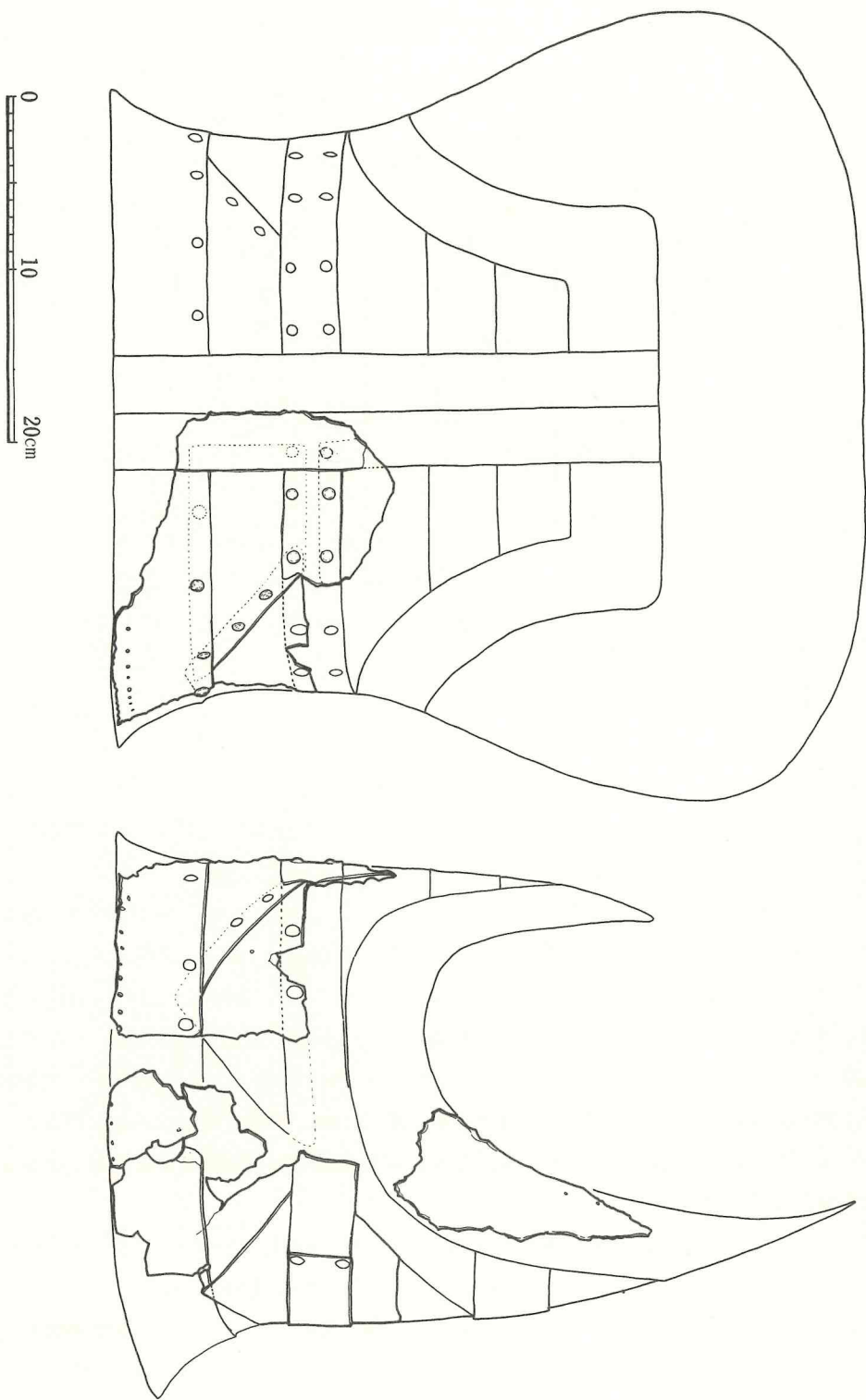
⑤は現存長9.9cm、巾2.9cm、厚さ1.0cmの身部非常に残りはない。断面は凸レンズ状をなし、剣身面に錆が認められる。両面に鞘の一部である木質が付着している。

⑥は現存長10.0cm、幅2.9cm、厚さ0.6cmの薄手の身部である。断面は、凸レンズ状をなし剣身面に錆は認められない。全体に残りは良くない。

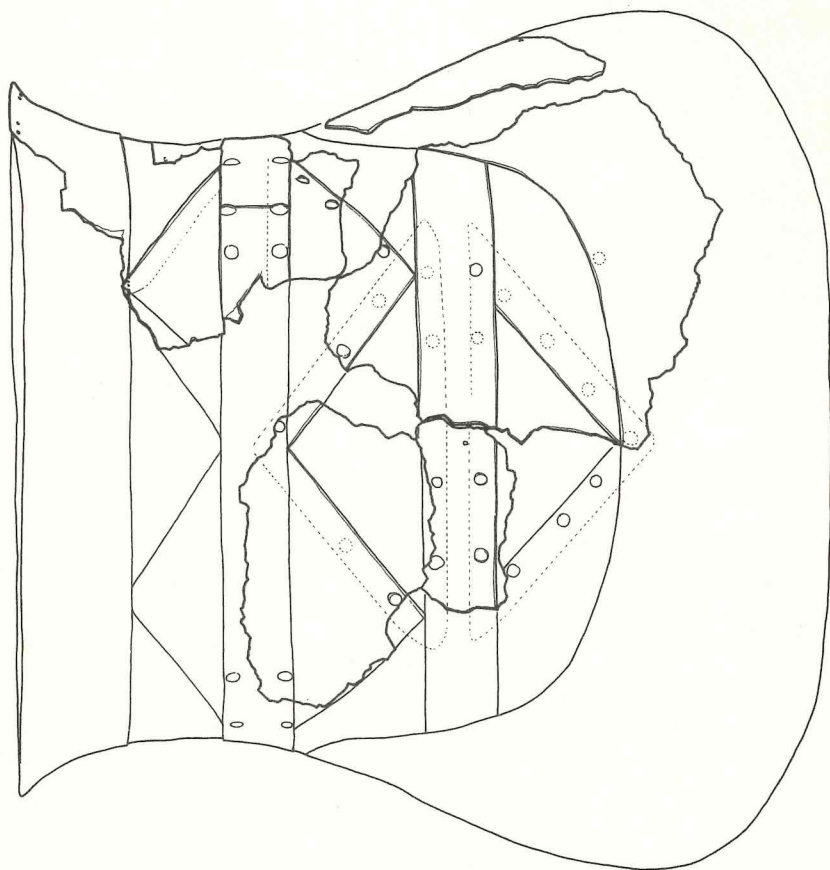
直刀、鉄鏃（8図⑦～⑮）

祠内より2個体と祠の主体部より3個体出土した。いずれも破片であり全長を知り得るものはない。

⑦は、錆の著しく付着したもので、保存状態は悪い。切先部分で現存長10.3cm、刃部巾は、錆のため不明である。



7 图 短甲(復原)実測图



⑧も1同様切先部分のみで保存状態は良くない。現存長13.9cm、切先、先端は欠損している。刃部巾は、刃先が折損しており不明である。

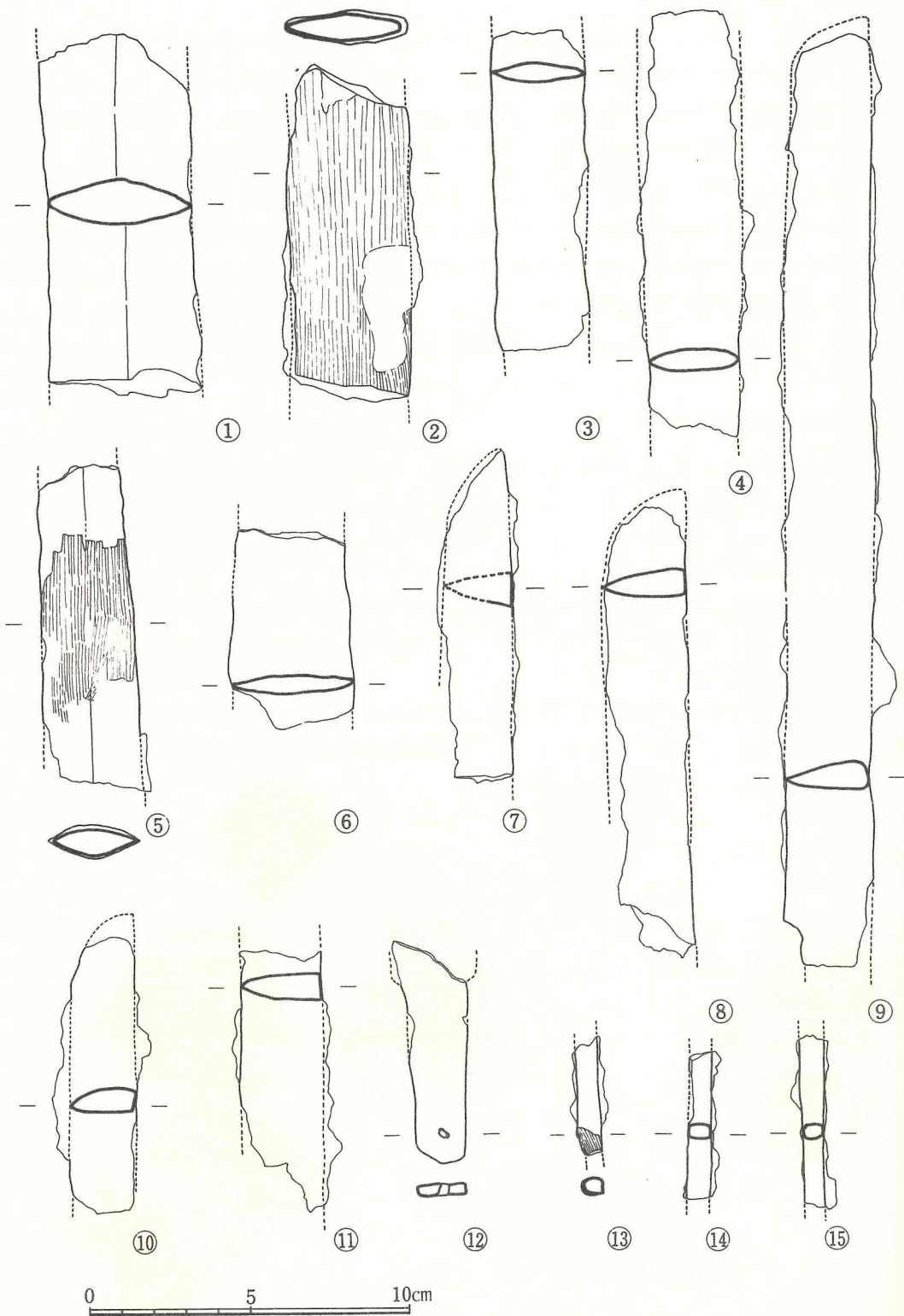
⑨は、切先先端と茎部が欠損している。現存長29.1cm、刃部巾は3.0cmである。軽度であるが内反りしている。

⑩は、祠内より出土したものである。身部で現存長8.0cm、刃部巾は、2.9cmを測る。

⑪は、⑧同様祠内より出土した切先部分である。切先先端・刃部はほとんど折損しておる。刃巾は切先先端付近で20cmを測る。

基部⑫は、現存長6.9cmで端部は残っている。径0.2cmの目釘孔が一孔あり、茎部断面は厚さ0.4cmで、棟側・刀側ともにほぼ同じであり刀剣のいずれの基部かは、判断がつかない。

茎部⑬～⑮は、鉄鏃の茎部と考えられる。断面は、隅丸方形であり⑬は、一部に木質が残る。



8 図 鉄剣、鉄刀、鉄鏃実測図

須恵器（9図 写真㊦）

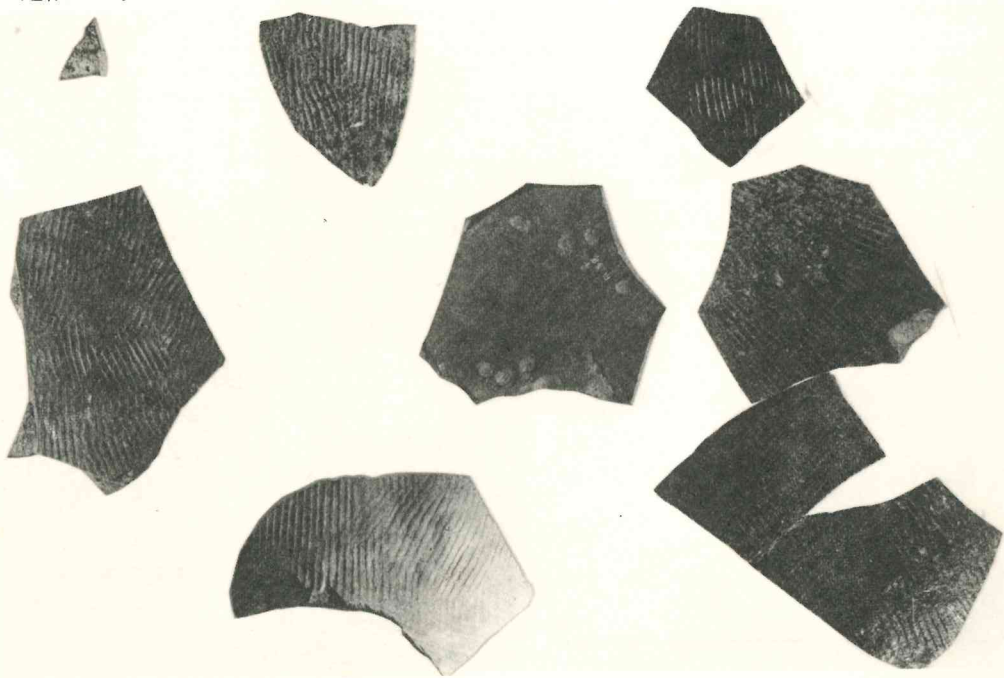
I区墳裾部で出土した。①は甕の口縁端部と考えられるが小片の為、口径は不明。頸部は外反し口縁直下に断面「コ」字状凸帯をめぐらす。器面は表裏ともにナデ調整である。胎土は密、焼成は良好で堅緻、色調は青灰色を呈する。②～⑥は甕胴部片である。外面は、平行叩きで、2次調整はみられない。内面は同心円文の叩きを施した後、丁寧にスリケシ調整を行なっており、叩き痕はまったくといってよいほどわからない。胎土は密、焼成は良好で堅緻、色調は青灰色だが、外面に自然釉が付着しており、緑褐色を呈す。薄手で非常に丁寧な作りの土器である。⑦、⑧は甕底部付近と考えられる。外面は巾の細い平行叩きを一部分重複させながら行なっており、2次調整はみられない。内面は、同心円文の叩きの後丁寧にスリケシ調整を行なっており、叩き痕はほとんどわからない。胎土は密、焼成は良好で堅緻、色調は青灰色を呈す。若干厚手で焼成時の空気泡がみられる。
(村上、高橋)

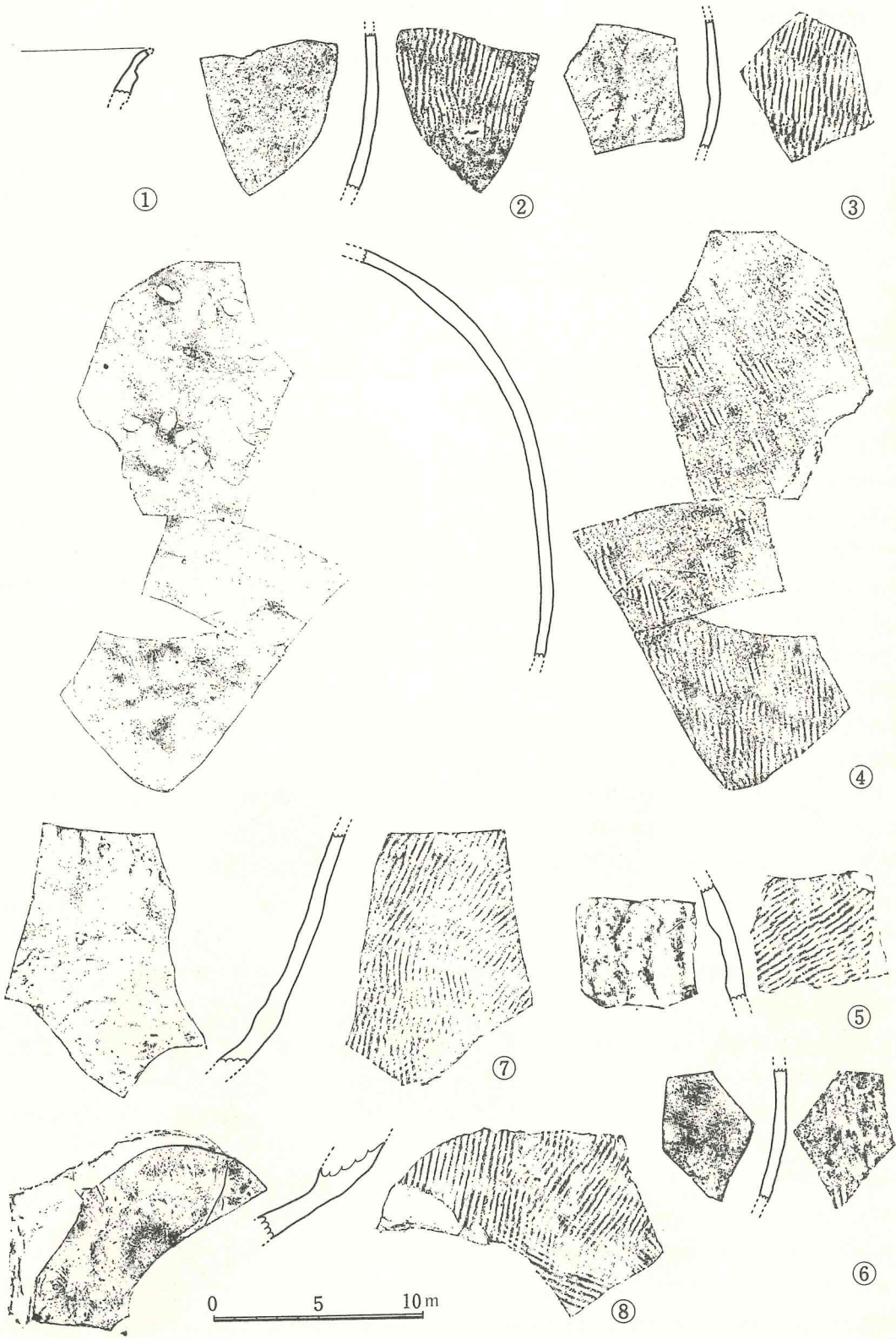
IV. 考察 須恵器について

須恵器について、今回の発掘で出土した須恵器は、現地調査で表採されたものと、表土除去中に出土したもので、現位置を保っていたものはなかった。しかしながら、古式須恵器は、多くの場合葬送儀礼に伴う墳丘祭祀としてばらばらに破損し埋めることがあり^①、ここに発見されたものも墳丘祭祀として使用されたものとみることができであろう。

出土した須恵器は、小形の甕の口縁部の少片と胴部・底部片であり、詳細な時期を決定するには、問題はあるが、大阪府の陶邑古窯址などでは、叩きの変化による編年も行なわれており、それを援用しながら考察を試みる^②。

口縁部片は、少片であり復元は不可能であるが、断面の形態からTK85窯の甕小型CあるいはB類に近似する。また、このような形態は、1-2段階以降には全く認められない。





9 図 須恵器実測図

胴部・底部片の叩き文様は、表面は、普通の巾の平行叩き目文、裏面は同心円叩きの後、ていねいなスリ消しを行なっている。これと同様な技法は、TK85窯10、TK73窯7、TK305 窯4、TK306 1.2.3.4.5.などと近似する。

以上の観察結果から、陶邑編年のI-1段階あるいは、I-2段階に位置づけられる。またI-1段階に出土する須恵器は、朝鮮半島の陶質土器と類以しており、近年福岡市有田遺跡^③では、土師器と共伴して類以の高坏が出土しており、5世紀中葉に位置付けられている。このようなことから考えて、この須恵器も5世紀中葉あるいは後半でも古い時期に位置づけられることは、ほぼ間違いないと思われる。現在までのところ県下では最古の須恵器であり、陶邑製品と類似する特徴を示している。(村上)

短甲について (10図)

宝剣山古墳出土の短甲は九州では類例の少ない三角板鉸留式短甲であった。我が国において鉄製短甲は京都府椿井大塚山古墳や大阪府紫金山古墳出土の豎刻板革綴式短甲などを最古例にして、以後方形板革綴式、長方形板革綴式、三角板革綴式、三角板鉸留式、横刻板鉸留式という変遷をたどることが確認されている^④。

なかでも鉸留式短甲の出現は鉸留技法の導入によって短甲の構造強加と製作の省力化を可能にした点で技術的な画期と評価されている^⑤。三角板鉸留短甲を出土

する古墳で古式なものとしては大阪府野中古墳や滋賀県新開古墳、福岡県月ノ岡古墳などがあげられるが、これらは5世紀中葉の時期に比定されている(11図)。

短甲は前胴地板配置が小林謙一氏のいうA型で、革綴覆輪を有し、胴一連のものが殆んどである。地板の重なりが厚くなるのを避ける為か三角板の頂点になる箇所での鉸留はみられない^⑥。各鉸頭間の間隔も短い。

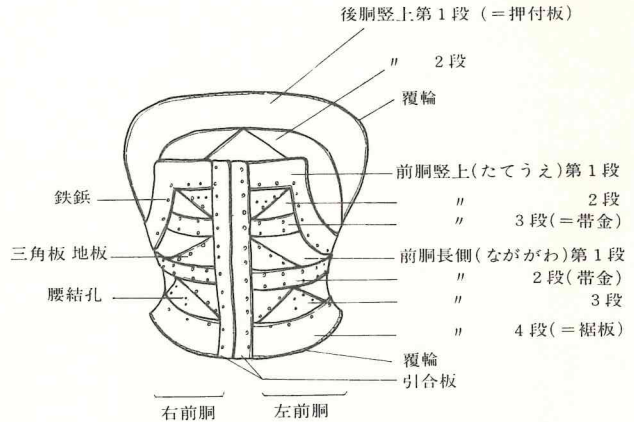
三角板鉸留式と横刻板鉸留短甲がほぼ半々の比率で出土した河内黒姫山古墳は両型式の短甲の交代期にあたる時期のものと考えられており、5世紀後葉でも中葉に近い年代が考えられる。ここでは小林のA、B両型式のものが混在しており、7号短甲にみられるように右前胴開閉式、小林B型、鉄覆輪、三角板頂点の鉸留といった新しい特徴を示している。

九州において短甲は65例が知られているが^⑦、三角板鉸留短甲は宝剣山古墳を含めてわずか6例を数えるのみである。

福岡県浮羽郡吉井町月ノ岡古墳、同県浮羽郡徳丸塚堂古墳、同県行橋市稲童21号墳、宮崎市下北方町地下式5号横穴、宮崎県えびの市真幸島内地下式横穴、大分県宝剣山古墳である。

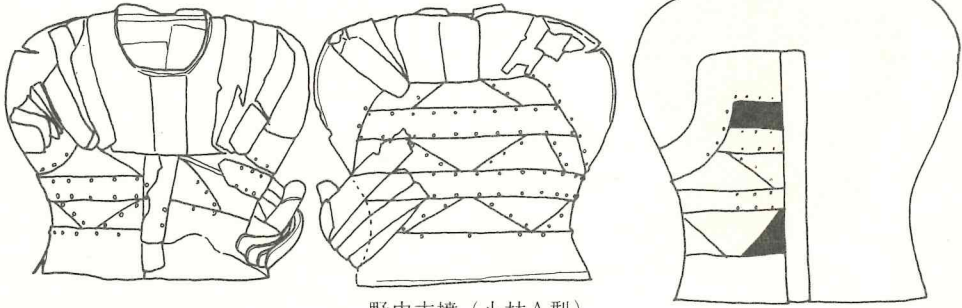
九州出土の三角板鉸留短甲 (12図)

●月ノ岡古墳 月ノ岡古墳は豎穴式石室に九州では類例のない長持形石棺(阿蘇溶結凝灰岩製)を納めた全長95mの前方後円墳で、円筒埴輪、各種器財埴輪、獸形鏡、玉類、巴形銅器、小札鉸留



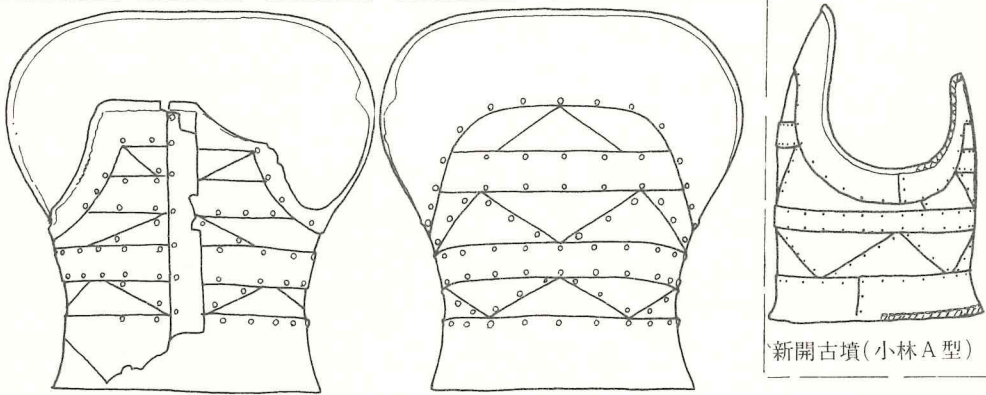
10図 短甲各部の名称

古式



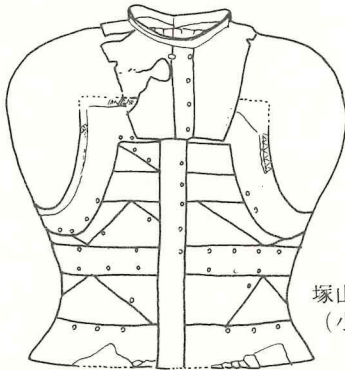
野中古墳 (小林A型)

新式

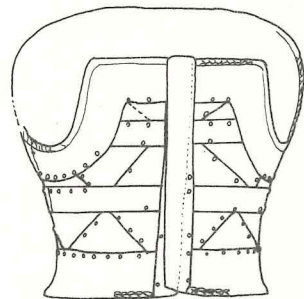


新開古墳 (小林A型)

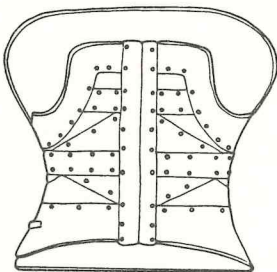
黒姫山古墳 (小林B型)



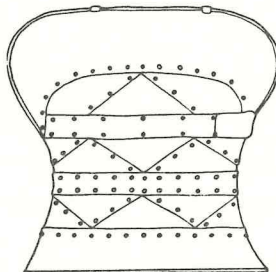
塚山古墳 (小林B型)



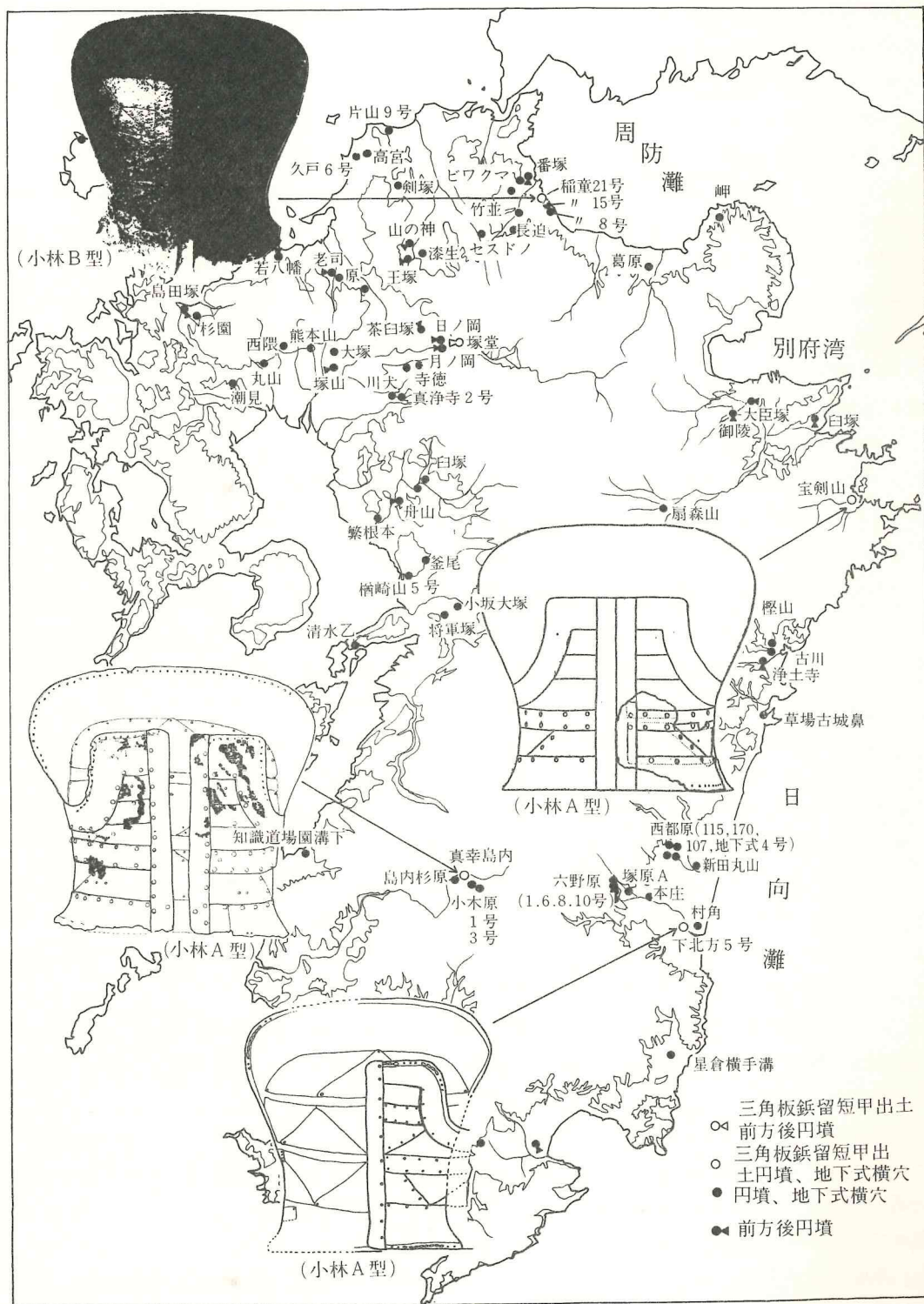
随庵古墳 (小林B型)



咸陽上栢里 (小林B型)



11図 実測図 (縮尺不同・各報文から転載)



12图 主要甲冑出土地分布图

眉庇付冑、横矧板鋌留短甲、三角板鋌留短甲、馬具などが出土している。短甲類のうちわけや、形態は不明である。

●塚堂古墳^⑧ 前方後円墳で前方部および後円部に初期横穴式石室を有す。前方部の石室から、仿製神獸鏡、直刀、鉾、貝釧、輪鏡、横矧板鋌留短甲(2)、三角板鋌留短甲(1)が出土。

三角鋌留短甲に関しては、公表された写真も後胴のみの為、詳細を記し難いが、後胴で豎上3段、長側4段の7段構成、革覆輪である。各鋌留の間隔は長く、新式の特徴を示す。墳丘出土の円筒埴輪の型式や、木心鉄張の輪鏡(小野山節氏のいう新式のもの)からも古墳自体は5世紀後葉～末の築造時期に比定される。

●稲童21号墳^⑨ 円墳で豎穴系横口式石室を持つ。三角板鋌留式と横矧板鋌留式短甲を各1領、鉄刀、三輪玉、鹿角刀装具、鉄鋏、馬具(轡、三環鈴)、須恵器等を出土する。調査者の一人山中英彦氏の御教示によれば須恵器はI型式の後半のもので、5世紀の末～6世紀初頭までくみならず、5世紀後葉に比定できるという。

三角板鋌留短甲は前後とも7段構成のもので、地板の配置は小林B。前胴2段目には左右各2枚の三角板を使用する。帯金は地板幅の約半分程度で、右前胴引合せ板が上重ねになる。後胴押付板はゆるい円弧状を呈し、鉄覆輪を用いている。黒姫山古墳出土(7号)例に類似すると思われる。

●下北方地下式5号^⑩ 妻入りで奥行の長い長方形プランをした古式の地下式横穴で、玄室内からは獸形鏡(2面)金製垂飾付耳飾、丁字頭勾玉、直刀、鉾、鉄鋏、馬具(鞍金具、木心鉄張輪鏡、杏葉、三環鈴など)農工具(手斧、鎌)などが出土している。短甲は屍床の南側に横矧板鋌留短甲を、北側に眉庇付冑や頸甲と近接して三角板鋌留短甲が副葬されていた。5世紀後半～6世紀初頭に比定。

三角板鋌留短甲は後胴高45.5cm、押付板左右幅44.5cmを測り、前胴・後胴ともに豎上3段、長側4段からなる7段構成のものである。右前胴開閉式で皮革蝶番を備えている。革包覆輪、小林A型で前胴豎上2段は左右とも方形板である。鋌頭間隔は約3.0cmと宝剣山のものより狭くなっている。

●島内地下式横穴^⑪ 鉄剣、鉾、斧などの出土が報告されている

短甲は胴一連で前・後胴とも7段構成。後胴高約40.8cm、押付板左右幅45cm、革組覆輪、小林A型で前胴豎上2段および長側1段は方形板を使用している。前胴長側3段の引合せ板に接する地板は三角形ではなく、切出ナイフ形のものである。これは前述の下北方例や、宝剣山例、黒姫山古墳出土5号例などでも同様にみられる。鋌頭間の平均は2.7～3.0cm。

ところで三角板鋌留短甲において前胴長側3段めの地板の配置が小林A型の場合、前胴豎上2段に方形板を使用し、小林B型の場合は三角板を用いる例が殆んどであり、前胴豎上2段めと、長側3段の地板の配置に強い相関的な関係を認めることができるのである。すなわち、小林のA型、B型は単なる工人の気まぐれによるものではなく、氏の指摘するように短甲製作工人の技術系統の差ととらえ得るようである^⑫。さらに、三角板鋌留短甲として古式の一群に位置づけられる野中古墳や新聞古墳出土のものに小林B型がみられず、すべてA型であることから、B型のはA型にやや遅れて製作が開始された系統のもので、その後A型と併行して製作されたと考えられないであろうか。黒姫山古墳では11領の三角板鋌留短甲のうちA型3領、B型5領となっている。B型の例としては他に、岡山県総社市随庵古墳^⑬、奈良県五条市塚山古墳^⑭、同県奈良市円照寺墓山1号墳^⑮、福岡県稲童21号墳などでも確認されるが、海を越えた朝鮮半島で出土の2例がやはりこのB型であること

は注目に値する。

韓国釜山市蓮山河古墳出土品（両胴開閉式、鉄覆輪、釣壺蝶番）と、伝咸陽上栢里出土例（右前胴一連、皮革方板蝶番、鉄覆輪）で穴沢、馬目氏は日本からの搬入を想定している¹⁶。

九州における三角板鋌留短甲出土墳は月ノ岡古墳を最古にし、他はおよそ5世紀後葉～末に位置づけられるものであった。また月ノ岡を除くと、豊前から筑前の一部にかけてみられる稲童の竪穴系横口式石室、筑後色の強い塚堂の羨道部の短かい扁平割石積み石室、宝剣山古墳の「豊後海部地域」特有の箱式石棺、宮崎の地下式横穴と、それぞれの地域に特徴的な内部主体を採用していることから、これらの墳墓が地域の伝統を強く保持した在地首長のものであることが推察される。

下北方地下式5号や稲童21号墳にみられる装飾品、武器（短甲2領を含む）馬具、農具などの豊富な副葬品は塚堂古墳をはじめ、同時期の前方後円墳のものに比べても遜色のないものであり、当該地域に於ける彼らの地位の高さを物語っている。鉄製農具という生産手段を保有し、新式の武器類で威容を誇る武人的首長の姿を想起したい。それらの品々が彼らによって自給し得るものではないとするなら、高度な技術と生産の機構を有す地域からの供給によると考えねばならず、短甲に関して言えば、畿内政権による生産、配布が説かれている。このような考えに従うなら宝剣山古墳を含む九州出土の6例の三角板鋌留短甲もまた彼の地で製作され、供給をうけたものとなる。実際宝剣山古墳出土の須恵器甕が大分府陶邑の古い段階の製品である可能性が強いことをも考えあわせると、具体的な入手の経緯を問わずに言えば、それらが畿内から持ち込まれたものの一部であったことは認められよう。

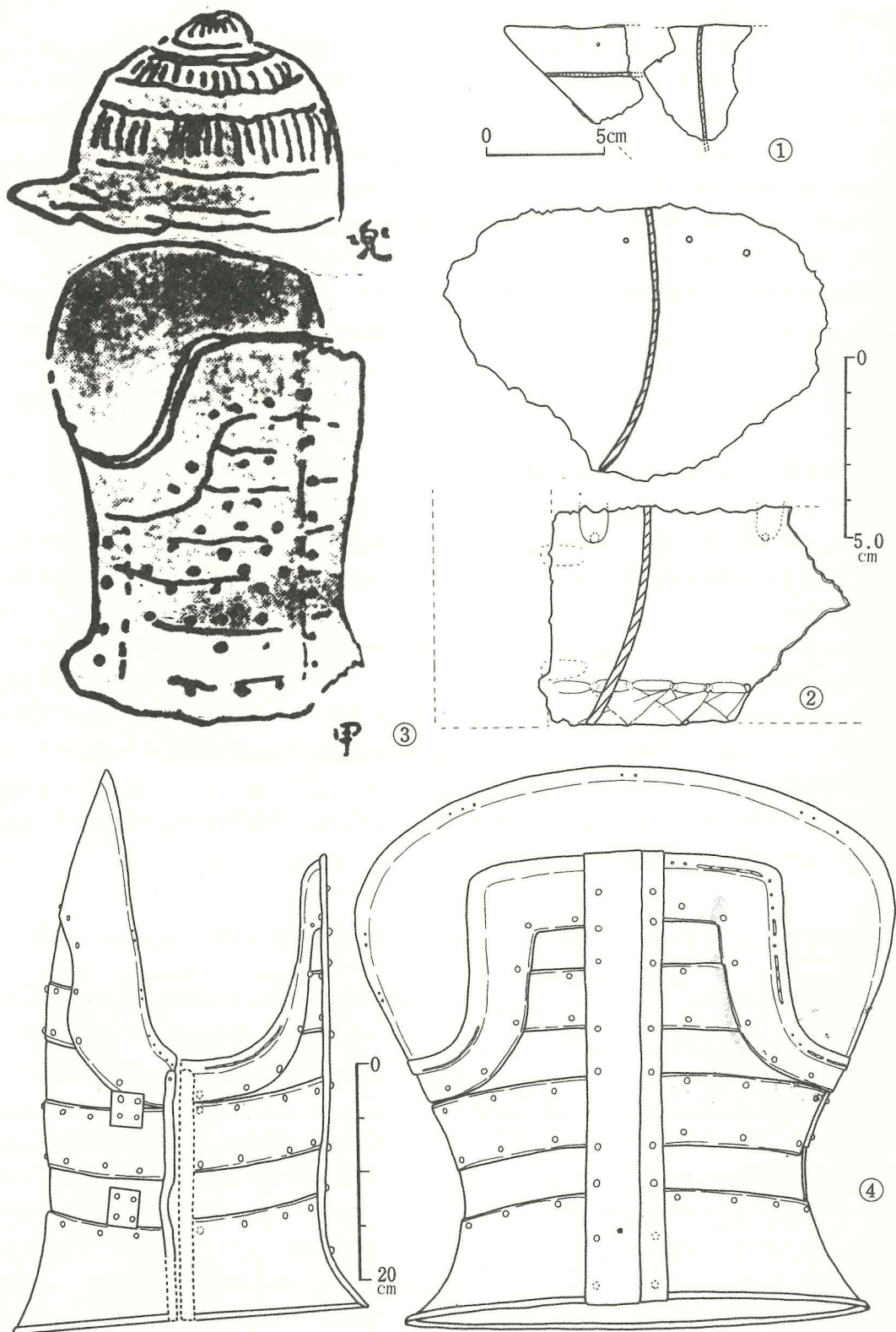
ところで大分県内出土の短甲は宝剣山の他に数例が報じられているがその実態は明らかでなく、以下若干の検討を加えながら紹介しておく。

大分県出土の短甲（14図）

●大分市御陵古墳¹⁷ 古式の墳形を留めた全長75mの前方後円墳で結晶片岩を用いた2基の箱式石棺を主体部にする。盗掘をまぬがれた遺物として碧玉製管玉、鉄刀、剣、鉄鏃、鉈片の他に三角板革綴短甲の一部が出土している（14図-1）。綴孔のみられる三角板で厚さ1.6mm内外を測る。墳形や鉄鏃の形式から5世紀中葉前後の築造が考えられており、同時期における大分郡最大の古墳であることから大分国を統治した大分君の墳墓に比定されている。

●臼塚古墳¹⁸ 臼杵市稲田所在の前方後円墳。低い丘陵の端部に南面して築かれており、全長75m、後円部径48m、前方部幅40mを測る。墳丘には葺石、短甲埴輪の他に、2基の石製短甲が立ちならぶ。後円部に2基の舟形石棺があり、大形棺に3体、小形棺に2体が埋葬されていた。副葬品として大形棺から位至三公双龍鏡、獸帯鏡各1面、硬玉勾玉、貝釧、短甲片が出土している。短甲は三角板革綴式で、革組覆輪を施した引合板近くの裾板片（14図-2）と後胴押付板の一部が現在している。臼塚古墳は5世紀中葉でも古い時期に位置づけられる。

●葛原古墳¹⁹ 宇佐市大字葛原にある古墳で、航空写真などからも帆立貝式の前方後円墳だった可能性が高い。現在は円墳状になっており、径55mを測る。三段築成の墳丘からは断面コ字形のタガを持つ円筒埴輪が出土する。明治以前に発掘されており、仿製四神四獣鏡他数面の鏡、管玉、刀子、須恵器の他横剗板鋌留短甲、眉庇付冑が羨道部の短い竪穴系横口式石室に副葬されていた（14図-3）眉庇付冑は小札鋌留式らしい。短甲は前胴7段構成で、右前胴開閉式と推測される。眉庇付冑は5世紀中葉から末にかけておこなわれたもので、埴輪や石室からも当古墳が5世紀後葉～末に



14图 大分県出土短甲

築造されたとして矛盾しない。

●扇森山横穴^⑩ 竹田市玉来大字桜瀬に所在の横穴群の一基から短甲(1)、鉄刀、鉄鏃、勾玉が出土している。短甲(14図-4)は高さ46.5cmの横矧板鋌留式で鉄覆輪、右前胴開閉式(方形蝶番金具)。押付板も大きく円弧を描き、この種のものとしては定式化した新式のものである。刀子状尖根の鉄鏃などからも5世紀末～6世紀前葉の時期が考えられよう。

以上内容の確かめられるもの以外に、大分市古国府大臣塚(5世紀代?の前方後円墳)、豊後高田市香々地岬一号墳(円墳、竪穴式石室、横矧板鋌留短甲)、下毛郡鶴居村相原古墳(円墳、横穴式石室、形式不明冑)からも甲冑の出土が伝えられているが不確実である。

(小結) 県下の短甲の変遷は次のように整理できる。

I期: 5世紀中葉。御陵、白塚古墳の三角板革綴短甲が認められ、豊後における短甲の最古例である。

II期: 5世紀後葉。宝剣山、葛原古墳の三角鉄鋌留短甲および横矧板鋌留短甲、眉庇付冑が確認できる。

III期: 5世紀末～6世紀前葉。扇森山横穴の鉄覆輪横矧板鋌留短甲例がある。

日田、久珠地域を除いて、一応豊前、豊後とくまなく出土している。国東半島から宇佐にかけて存在する前方後円墳の内部主体に関する調査が行なわれれば、これらの古墳群からの短甲出土例が増えるものと思われる。

宝剣山古墳出土の短甲は、小林A型、革覆輪で、前胴竪上2段目地板および長側1段に三角板を使用せず、方形および長方形の板を配すものと復原された。これに類似したものとして宮崎県島内杉原例をあげ得るが、これは胴一連、革組覆輪で、鋌留箇所も多く、鋌留箇所を少なくした宝剣山古墳例はこれより新しい特徴を示している。大分、宮崎といった東九州出土の三角板鋌留短甲がすべて小林A型であるという事実については、たまたまそういうことになっているのか、それともA型、B型という製作系統の違いが選択的な配布となって反映された結果なのか等々疑問が尽きないが今後の資料の増加に待ちたい。(高橋)

註① 石山勲「古墳における古式須恵器のあり方について」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』X 1977)

② 中村浩他『陶邑』Ⅲ(大阪府文化財調査報告書第30集 大阪府教育委員会1978年)

③ 山崎純男「福岡市有田遺跡出土の陶質土器と古式須恵器」(『古文化談叢』第6集1979年)

④ 小林謙一「甲冑製作技術の変遷と工人の系統」(『考古学研究』20巻4号、21巻2号、1974年)

⑤ 北野耕平「中期古墳の副葬品とその技術史的意義—鉄製甲冑における新技術の出現」(『近畿古文化論改』1963年)

⑥ 田中新史「御嶽山古墳出土の短甲」(『考古学雑誌』64巻1号、1978年)による。

⑦ 福尾正彦氏の御教示による。

⑧ 宮崎勇造「筑後国浮羽郡千年村徳丸塚堂古墳」(『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』10、1935年)

⑨ 大川清「稲童古墳群第1次調査抄報」1964年
『同第2次調査抄報』1965年

⑩ 茂山護「下北方地下式横穴5号」(『宮崎市文化財調査報告』3号、1977年)

⑪ 宮崎県総合博物館『特別展 日向の古墳展』1979年

⑫ 註④に同じ

⑬ 鎌木義昌・間壁忠彦他『総社市随庵古墳』1965年

⑭ 伊達宗泰・北野耕平『奈良県埋蔵文化財調査報告書』第1集1957年

⑮ 佐藤小吉、末永雅雄「円照寺墓山第1号古墳」

⑯ 穴沢和光、馬目順一「南部朝鮮出土の鉄製鋌留甲冑」

(『朝鮮学報』第76集、1976年、『考古学からみた古代日本と朝鮮』西谷正編1978年再録)

⑰ 小田富士雄他『御陵古墳緊急発掘調査』(大分県文化財調査報告書第24集、1972年)

⑱ 小田富士雄「九州古墳発見甲冑地名表」(『九州考古学研究』古墳時代編1976年)では横矧板鋌留式となっているがこれは誤りである。14図-2は高橋実測

⑲ 賀川光夫「大分県における三つの竪穴式石櫛を有する古墳」(『西日本史学』第15集、1953年)14図-3は「宇佐市史」P387から転載

⑳ 真野和夫「竹田市扇森山横穴出土遺物」(『大分県地方史』第84号1976年)14図-4は真野氏原図提供

V. 結語

宝剣山古墳の主体部に使用されていたと考えた結晶片岩の石材は佐賀関半島周辺に産するものである。この石材を用いた石棺は弥生終末～古墳初頭の大在浜遺跡Ⅰ区出土石棺群^①を嚆矢とし、4世紀後半の佐賀関町猫塚古墳^②、5世紀前葉の坂ノ市野間古墳群^③、大分市蓬来山前方後円墳、5世紀中葉の築山^④、御陵前方後円墳などの大形首長墳にも採用されている。その分布範囲は佐伯湾岸から臼杵、佐賀関半島北岸および大分平野の一部で「豊後国風土記」の伝える「海部郡」にほぼ完全に一致する。この豊後海部に関して後藤宗俊氏の研究^⑤があるが、氏の所論によれば、〈海部郡〉の範囲にわたる海部の一元的設定は考えがたく少なくとも令制下の郷の規模をこえない単位ごとに部民が設定され、海部地方における前方後円墳の各グループはその単位にある程度対応するという。さらに「自然環境の制約上大規模な農業共同体の展開が考えられない」佐賀関、臼杵両地区こそを「豊後における典型的海人集団の根拠地」とみなしている。その論旨は大筋において納得のいくものである。

この海部地方は少なくとも弥生時代以降(下城式土器の分布などにみられるように)共通の文化的基盤を持つ相互に緊密な関係を結んだ小地域(各郷)からなっていたことが想定されるが、結晶片岩製箱式石棺の分布は古墳時代におけるその緊密な交通関係を具体的、地理的に示すものと言えよう。この海部地方で4世紀～5世紀前半代にかけて有力首長墳の継起的な築造がみられる地域は佐加郷、佐尉郷の地区であるが、5世紀中葉前後を境に臼杵地区に臼塚、下山の両前方後円墳が出現し、さらに海部の他地域に先がけて阿蘇凝灰岩の加工技術が導入され、石棺や石製短甲が製作されることに注目したい。すなわち臼塚古墳の舟形石棺^⑥に始まる凝灰岩の切石加工による石棺は、下山古墳では家形石棺となり、以後丸山古墳、神下山古墳と臼杵地方において首長墳の主体部は家形石棺が基本となる。5世紀中葉の時点でなお御陵古墳や築山古墳のように伝統的な結晶片岩製箱式石棺を主体部にしていた佐賀関から大分平野にかけての地域でも、坂ノ市王ノ瀬石棺^⑦、大分市世利門古墳^⑧にみられるように5世紀後半になると凝灰岩製家形石棺が採用され始め、以後6世紀後半(大分市丑殿古墳)～7世紀にいたるまで継続する。この凝灰岩製石棺の分布域は結晶片岩石棺の分布より広く、海部地方はもちろん大分川下流域、大野川中・上流域をも含む。

典型的な海人集団の根拠地とみなされる臼杵地区勢力の台頭の背景として一つに大和政権による西日本各地の海部集団に対する再編成、支配強化が考えられよう。佐伯湾岸一帯を自己の勢力範囲にしていたと思われる宝剣山古墳の首長が結晶片岩石棺や短甲類の供給を(地理的な関係からみても)この臼杵地区の、具体的には臼塚、下山両古墳に代表される首長にあおいたことは十分考えられ、ここに短甲をまとう在地首長に率いられ、航行活動に秀でた集団からなる「豊後海部」の一端をかいまみることができる。臼塚、下山両前方後円墳の首長はこれらの集団を統率するものであり、彼らが担った仕事の大きさ、彼らに期する畿内政権および他の政治集団の期待の大きさが、両墳の築造、凝灰岩加工技術の導入、下山古墳の鉄鋌多量副葬などにあらわれているといえよう。

宝剣山古墳の所在する佐伯から津久見にかけての地域は「豊後国風土記」および「和名称」のいう「穂門郷」に比定されるが、宝剣山古墳の被葬者はこの穂門郷の有力な在地首長の一人であり、生前(5世紀中葉を中心?)においては臼杵地区の臼塚、下山などの古墳すなわちその首長等を介して、遠く畿内政権につらなっていたわけである。古墳の築造時期は5世紀後葉でもやや古い段階と考えられる。(高橋・清水)

註①大分県教育委員会『浜遺跡』(大分県文化財調査報告第41集1980年)

②小田富士雄氏「猫塚古墳」(『中ノ原・馬場古墳緊急発掘調査』大分県文化財調査報告第15集1966年)

③賀川光夫・小田富士雄「野間古墳群調査報告」(大分県文化財調査報告第13集1965年)

④註②に同じ

⑤後藤宗俊「豊後国海部地方における在地首長の成立と発展」(『大分県地方史』第74号1974年)

⑥註②に同じ

⑦賀川光夫「五遺骸以上合葬の一例」(『考古学雑誌』44-1、1958年)

⑧小田富士雄「大分県下山古墳出土の鉄鋌」(『古文化談叢』第2集1974年)

宝剣山古墳

佐伯市向渡町所在古墳調査報告

発行日	昭和55年3月11日
発行	佐伯市教育委員会
印刷所	佐伯印刷株式会社